



## 四旬節第4主日 (ルカ 15:1-3,11-32)

父のところでは有り余るほどパンがある

今週の福音朗読は、弟が我に返って反省している場面から学びを得たいと思います。弟は次の言葉をつぶやきました。「父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。」(15・17) 父のところと、自分が今いる場所とのあまりの落差にハッとして、弟は取るべき態度が理解できたのでした。

先週、水曜日の午前中に釣りに行きましたら、型の良いアラカブが釣れまして、久しぶりにワクワクする釣りでした。これが釣り大会当日だったらどれだけ良かったらうか、と思いました。今日の小教区釣り大会は一体どういう展開になるのでしょうか。去年同様、磯から狙う方々に分があるのでしょうか。

1週間のうちにリハーサルと本番、2回も大きなアラカブを釣るのは奇跡に近いです。ですから今日は目標を立てず、参加した皆さんと大会を楽しめばそれでよいと思います。磯を歩きながら釣りをする方もいらっしゃるでしょうから、十分安全に配慮して釣りをしてください。自分の身は、自分で守る。ぜひ、お願いします。

福音朗読に戻りましょう。財産を無駄遣いしてしまった弟の判断は責められても仕方ありません。しかし弟の言葉には、光るものがあると思います。「父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。」(15・17) 弟は、父の家では雇い人であっても有り余るほど幸せがあることを思い出したのです。それに比べれば、父の家以外はすべて、「飢え死に」だと、気付いたのです。

最終的に弟は、「豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかった」(15・16) と考えます。ユダヤ人にとって豚は、宗教上食べてはいけない動物でした。宗教上禁じられていた動物は当然宗教上の汚れをもたらします。何より気にしていた宗教上の汚れを引き起こす動物にまですがらなければならない。そのみじめさは、どれほどだったのでしょうか。

もはや、迷っている場合ではありません。たとえ雇い人の一人として扱われても、父のもとで味わった豊かさ、宗教上も日常でも味わっていたあの豊かさに戻ろう。弟はすっかり生まれ変わりました。

ところで兄は、その父親のもとを離れずに生活していました。ですから父の家において、父のそばにすることが豊かな生活であり、父のところ以外はすべて飢え死にと変わらないことを理解していなければなりません。「この通り、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに」(15・29) 兄はまだ不満があるのでした。

兄はここで2つの過ちを犯したと思います。1つは、弟が飢え死にの状態から豊かさを取り戻せる父のところに戻ってきたことを喜ばな

ったこと。もう1つは、自分が父の家を離れず、宗教上も日常生活も、これ以上ない豊かさにあずかっていたのを感じ取っていなかったことです。それと比べると、弟は1つの過ちだったのです。父のところ以外は飢え死にと同じだということを理解していませんでしたが、父のところがあんなに豊かであったことは一度も忘れたことはなかったのです。

わたしたちも、この兄弟の取った行動を自分に当てはめ、考えることにしましょう。わたしたちにとって、父の家とはどこでしょうか。わたしたちが常に立ち帰るべき父の家とは、教会ではないでしょうか。

「父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。」(15・17) 神の家であるカトリック教会の豊かさと比べたら、それ以外の場所はどれもみな飢え死にしそうな場所なのです。たとえお金を湯水のように使う生活であっても、父なる神が用意してくださる洗礼や聖体やゆるしの恵みに比べれば、何を食べようが何を飲もうが、喉の渇きも空腹も終わらないのです。

わたしたちが、兄のように2つの過ちを犯しているのなら、いずれの過ちも認め、父なる神にゆるしが必要です。教会の豊かなお世話を受けながら父なる神に感謝の祈りも日々捧げていない。父なる神からの豊かさに比べれば他のものにあふれていても飢え死にと同じなのだといまだに感じていない。もしそうであるなら、わたしたちこそ回心が必要です。

もしわたしたちが、1つの過ちだけであるなら、立ち返って出直しましょう。父の家があんなに豊かであることは分かっていたのに父の家を離れてしまった。その人は立ち返りさえすれば、父の家であるカトリック教会は迎えてくださいます。

一つ問題があります。父の家の豊かさをもう一度思い出し、誰かが立ち返ってきたとき、わたしたちは例外なくその人を「よく帰ってきた。もう今までのことは水に流そう」と言って迎えるだろうか、ということです。わたしたちの心の広さが問われていると思います。もう一度出直して、父の家であるカトリック教会のお世話になろうとする人を、温かく迎える広い心が必要です。いざとなったら「立ち返ってくれてよかった。ありがとう」と声をかけるのだと自分に言い聞かせましょう。

人間は弱いので、過ちを犯します。また、過ちを犯した人をゆるせない弱さもあります。父なる神はそんなわたしたちに声をかけ、なだめ、皆が父なる神の豊かさにあずかれる方法を示してくださいます。それは環境を変えてあげることだったり、目標を明確に与えてあげることだったり、きっと神はそれぞれの神の家であるカトリック教会を「父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがある」そんな状態に保ち続けてくださいます。

父なる神の導きに全面的に信頼し、これからの日々を委ねてまいりましょう。どんな人も、父の家であるカトリック教会があんなに豊かであると忘れないならば、立ち返りのチャンスはなくなるならないのです。